

新規大卒就職活動における大学生同士の関係と「やりたいこと」

大学生の「語る-聞く」相互行為に着目して

大阪大学大学院 妹尾麻美

1 目的

本報告の目的は、新規大卒就職活動での仕事における「やりたいこと」が大学生同士の中でどのように捉えられているのかを検討することである。これまで、新規大卒就職活動を対象とした研究において、大学生が語る「やりたいこと」は、大学生と労働を結びつけるキーワードとして取り上げられてきた。香川(2007)は、新規大卒就職において「やりたいこと」が語られるのは、企業がそれを大学生に求めるためだということを、就職情報誌の分析を通じて明らかにした。そしてそれは、近年企業がフレキシブルな労働環境のもとで、即戦力を重視する在り方と結びついていると論じている。だが、大学生は企業の求める在り方にただ従い「やりたいこと」を語るのだろうか。本報告では就職活動中の大学生への聞き取り調査から、仕事における「やりたいこと」がどのように語られるのか、共に就職活動を行っている大学生同士の関係で語られる「やりたいこと」に着目し、その語りの内容を検討する。

2 方法

報告者が2012年2月から7月にかけて、就職活動中の大学生11名に対して実施した、2回から4回の継続的な聞き取り調査から分析を試みる。「やりたいこと」の語りを分析する際、自己の信条を<コード>として捉えるローレンス・ウィーダー(1974)の議論、またそれを援用している宮地(2012)の議論等を用いる。宮地(2012)は自律的なソフトウェア開発の現場において労働の「燃え尽き」が起きるメカニズムを企業による規範ではない、日常の相互行為から分析している。そこで本稿では、就職活動中の大学生同士の関係(交際相手、友人同士)と「やりたいこと」を結びつけて語られた聞き取りデータを中心に分析する。

3 結果

分析の結果、「やりたいこと」を「語る-聞く」大学生同士の相互行為により、彼らは個人的関心を追及していた。その個人的関心は、彼ら自身の「面目を保つ」こと、できるだけよい条件を持つ会社に「正社員」として「内定」をもらうこと、主にこの2点であった。ここから大学生の「やりたいこと」語りには「やりたいこと」を仕事へという文化的規範への随順に回収することのできない語りが明らかとなった。ただし「やりたいこと」をめぐる相互行為を通じて、より「やりたいこと」を語る就職活動実践に自らを巻き込んでいくこともわかった。

4 結論

就職活動における大学生の「やりたいこと」語りは、規範的な強制のみならず、個別の関心を維持しながら、共に就職活動を行う大学生同士の「語る-聞く」相互行為によって成立していた。そして、ここからは、大学生が労働市場に迎合的とはいええない個別の関心を保とうとしていること、しかしそれは「やりたいこと」の語りに回収されることで労働市場における積極的な存在として初職に没入する結果となりうること、これら2点が指摘できる。

参考文献

- 香川めい,2007,「就職氷河期に『自己分析』はどう伝えられたのか」『ソシオロゴス』31:137-51。(再録 香川めい,2010,「第7章『自己分析』を分析する 就職情報誌に見るその変容」 荻谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学』東京大学出版会,171-197.)
- 宮地弘子,2012,「ソフトウェア開発現場における自発的・没入的労働の相互行為論的考察—「人々の社会学」の視角から—」『社会学評論』63(2):220-237.
- Wider, Lawrence D., 1974, "Telling the Code," Roy Turner ed., *Ethnomethodology*, Harmondsworth: Penguin, 144-72. Originally published by *The Hague: Mouton as Language and Social Reality: The Case of Telling the Convict Code*, 1974. (=2004, 「受刑者コード—逸脱行動を説明するもの」 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』せりか書房,167-232.)